

学位請求論文審査要旨

報告番号: 甲 第 号

氏名: 三國珠杏 君

論文題目: Empirical Investigations on Art Viewing Behavior and Art Evaluation: An Interdisciplinary and Cross-Cultural Study

審査担当者

主査: 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員

博士 (人間環境学)

川畑 秀明

副査: 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員

博士 (心理学)

梅田 聡

副査: ウィーン大学心理学部教授

Ph.D.

Leder, Helmut

副査: ウィーン大学歴史文化学部教授

Ph.D.

Rosenberg, Raphael

副査: ローマ第三大学教育学部教授

Ph.D.

Mastandrea, Stefano

副査: モントクレア州立大学教育基礎課程准教授

Ph.D.

Tinio, Pablo

1. 本論文の要旨

(1) 本論文の概要

どのように芸術作品が鑑賞されるのか、人がどのように美を感じるのかという問題は、人間の行動や認知の働きに関する問題を含んでいるために芸術学や美学だけに限定した研究では十分に明らかにすることができない。そのため、心理学の一分野としての実験美学は、実証的な方法論を用いて美や芸術の問題を数量的に扱うことを重視し、その背後にあるメカニズムの探求を綿密に行ってきた。また、美術館や博物館等の展示された作品の前で人々がどのように作品を鑑賞するのかを調べることは重要な課題であるが、実験的統制をとることが困難であり、どのような要因が鑑賞行動に影響を与えるのかについて明らかにするためには実験室研究が不可欠である。本論文では、美術館等での実環境での鑑賞と実験室場面での鑑賞のギャップを埋めること、鑑賞者の文化的背景が鑑賞行動や評価に与える影響や違いについて明らかにすること、を目的として、計3つの研究を行った。研究1では、既に美術館等での鑑賞場面で鑑賞とともに作品の鑑賞時間が低減することが既に知られてきた博物館疲労という現象を実験室場面での鑑賞課題に当てはめて再現し、実験的に日本と欧州とで比較をした。その結果、文化に共通して鑑賞作品数とともに鑑賞時間と評価の程度が低減し、その原因として注意の低下が要因となっていることを2つの異なる実験により明らかにした。研究2では、研究1と同様に美術鑑賞の繰り返し試行に伴う作品への注意の低下の問題について扱い、その対策に関する検討を行い、鑑賞のまとまりの質を変化させることが重要となることを2つの実験により示した。さらに、美術作品の鑑賞や評価を含む3つの多様な研究(モザイクパタンの潜在的・顕在的評価実験、美術作品の属性が美しさの評定に与える影響を機械学習を用いて分析した研究、絵画や風景写真を用いた視線計測実験)を日本と欧州との比較から文化間の類似性・相違性について検討した。

(2) 本論文の構成（目次）

1. Introduction

- 1.1 What is empirical aesthetics?
- 1.2. A gap in the experience of art between lab-based and real-life settings
- 1.3. The skewed participants' demographics included in the past research
- 1.4. An overview and the structure of the present dissertation

2. Study 1—Translating well-documented attention decrease phenomenon towards art from museum studies into lab-based study

2.1. Study 1-1: Cross-cultural replication study with an updated research design for examining the repeated art viewing effect in a lab

- 2.1.1. Method
- 2.1.2. Results
- 2.1.3. Discussion

2.2. Study 1-2

- 2.2.1. Method
- 2.2.2. Results
- 2.2.3. Discussion

2.3. General Discussion and Conclusion of Study 1

3. Study 2—Empirical investigation on the possible causes and how to counteract the attention decrease phenomenon in lab-based setting

3.1. Study 2-1: Examining impact of information about artworks on attention towards them

- 3.1.1. Method
- 3.1.2. Results
- 3.1.3. Discussion

3.2. Study 2-2: Examining one of the possible causes of the decreased attention towards artworks, 'habituation'

- 3.2.1. Method
- 3.2.2. Results
- 3.2.3 Discussion of the pilot study

3.3. Main Study

- 3.3.1. Method
- 3.3.2. Results
- 3.3.3. Discussion of Study 2-2

3.4. General discussion of Study 2

4. Study 3—Cross-cultural similarity/difference in aesthetic evaluation and art viewing

4.1. Study 3-1: the universality of the preference for symmetry

- 4.1.1. Method

| | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| 4.1.2. Results | |
| 4.1.3. Discussion | |
| 4.2. Study 3-2: The differences in the concept of beauty across culture | |
| 4.2.1. Method | |
| 4.2.2. Results | |
| 4.2.3. Discussion | |
| 4.3. Study 3-3: the cross-cultural diversity in eye movement patterns while viewing art between two cultures | |
| 4.3.1. Method | |
| 4.3.2. Results | |
| 4.3.3. Discussion | |
| 4.4. General discussion for Study 3 | |
| 5. General Discussion | |
| 6. References | |
| 7. English Abstract | |
| 8. German Abstract | |
| 9. Additional Achievements | |
| 9.1. Specker, E., Leder, H., Rosenberg, R., Hegelmaier, L. M., Brinkmann, H., Mikuni, J., & Kawabata, H. (2018). The universal and automatic association between brightness and positivity. <i>Acta Psychologica</i> , 186, p. 47-53. | |
| 9.2. Pelowski, M., Cabbai, G., Brinkmann, H., Mikuni, J., Hegelmaier, L. M., Forster, M., Rosenberg, R., & Leder, H. (2020). The kitsch switch—or (when) do experts dislike Thomas Kinkade art? A study of time-based evaluation changes in top-down versus bottom-up assessment. <i>Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts</i> . Advance online publication. doi: 10.1037/aca0000302 | |

(3) 各章の要旨

第1章 Introduction では、実験美学における鑑賞と評価に関するこれまでの議論を概観し、実験美学における限界と問題について丁寧に整理、概観した。実験美学は19世紀のドイツの物理学者フェヒナーに端を発し、美や芸術の鑑賞、創造性などに関する諸問題を対象として、実証的研究を展開してきたが、対象とする現象や測定方法にかかわらず、ほとんどの研究が実験室で行われてきた。その理由は、実験室での実験的検討が、標準化された厳密な方法で環境や実験刺激を統制でき、諸変数間の影響関係を明らかにする上で理想的な条件を提供しうると考えられてきたからである。確かに、美術館や博物館、公共空間等の芸術作品が存在しうる実環境では、交絡要因を制御しながら関心のある要因を確実に検討することが困難であり、芸術作品とその鑑賞者の間の相互作用を検証する場合においても実験室での十分に制御された条件についての検討は不可欠となる。しかし、近年、人は実環境と実験室環境とでは作品鑑賞の体験や評価が異なり、実環境でのリアルな体験が鑑賞行動や評価に影響することも実証されてきている。本論文ではまず、美術館等での実環境と実験室との差異に関する問題点について、過去の研究を踏まえ理論的に整理した。さらに、これまでの実験美学は、芸術体験は世界共通の事象であり「もし全ての人が美的能力を共有しているのなら」という

暗黙の前提のなかでその能力や感じ方の共通性についての検討を行ってきたが、ほぼ西洋文化圏でしか研究がなされてこなかった現状がある。しかし、実験対象者となっている欧米の大学生においての実験結果を、異なる文化や社会階層の様々な人々の実験結果と比較することなしに普遍的なものとして解釈してきたことについての批判も高まってきており（いわゆる WEIRD 問題）、著者は美術鑑賞の文化的普遍性と相違についてより詳細な検討することの重要性を過去の研究の知見と共に整理し、提示している。さらに、第 1 章では、本論文の構成と、本研究に含める 3 つの研究の位置づけを明確にしようとした。

第 2 章 Study 1 では、まず、美術館や動物園等の実環境での鑑賞行動で知られている博物館疲労（鑑賞の時間的経過とともに鑑賞対象を見る時間が短くなっていくという現象）を実験室環境で再現するとともに、日本とオーストリアとで異なる文化的背景を持つ実験参加者を対象として美術作品の鑑賞実験を行い、結果について比較検討した（Study1-1）。その結果、実験参加者の文化的背景にかかわらず、作品鑑賞の試行数が増えるにつれて、作品 1 つ当たりの鑑賞時間が徐々に短くなっていくこと、作品の評価が低くなっていくという、博物館疲労に該当する現象が明らかになった。このことは、過去の研究で示されてきた実環境下での鑑賞時間および評価の低減現象が実験室においても再現でき、しかもこの現象が実験参加者の文化に依存しないものであることを示した。著者らは実験室条件でのこの現象の原因を注意の低下効果として捉えた。さらに、Study1-2 では、Study1-1 を改変し、試行の半数が経過したところで 90 秒間の休憩時間を入れて検討した。その結果、休憩によらず、鑑賞時間と評価の両方が低減していくことが日本およびオーストリアでの比較実験によって明らかとなった。しかし、これらの実験において、日本とオーストリアでの実験結果が同様の結果として示されたものの、異なった傾向も部分的に認めており、その点は第 3 章において異文化比較の実験研究として拡がりを見せていくことになる。

第 3 章 Study 2 では、Study 1 で明らかにした、美術作品の繰り返し鑑賞による注意の低下の原因の解明とその対策について実証的に検討することを目的とした。具体的には、Study 2-1 では日本人の実験参加者を対象として、従来からある対策として知られている作品に関する情報を提供することで鑑賞時間の減少を止めることができるかどうかを実験的操作により検討した。その結果、作品についての情報を与えてしばらくは作品の鑑賞時間を延ばすことにはなっても、作品鑑賞の試行数とともに鑑賞時間は短くなり、鑑賞時間は鑑賞者の注意の低下を止めることはできないとした。また、Study 2-2 では、美術鑑賞における鑑賞時間や評価の低下の原因が慣れ（habituation）によるのかについて検討し、鑑賞時間や評価の低減の対策として、鑑賞する作品の「まとまり」の系列の質について、作品が年代ごとでまとまっている条件と、風景画や肖像画などのカテゴリーでまとまっている条件とで比較検討した。その結果、慣れは注意の低下をまねく 1 つの原因となることが示唆されたこと、時代ごとのまとまりの方がカテゴリーでのまとまりよりも注視時間が長くなったものの、鑑賞の試行数が増えるごとに鑑賞時間の低減が見られることが明らかになった。

第 4 章 Study 3 では、鑑賞者の文化的背景が美術作品の評価や鑑賞行動の様々な側面に及ぼす影響について、日本とオーストリアでの 3 つの異なる異文化比較による実験的研究を通して検討した。まず Study 3-1 では、モザイクパタン画像の対称性に対する選好についての文化的普遍性と特異性について、潜在連合課題と顕在評定課題との比較をもとに検討した。この研究は既にオーストリアにおいて検討された実験的研究を新たに日本人を対象に再現し比較したものであり、日本人でも潜在的・顕在的評価の双方において対称性が高いものを高く評価することが明らかになった。次に Study 3-2 では、日本とオーストリアとで、美術作品に感じられる美しさの評価に作品のどのような属性が関与するのかについて、オンラインによる評定実験と機械学習を用いた分析手法により検討した。本研究では、過去の研究によって美術作品の評価に影響することが認められている 17 の属性を美的評価の説明変数として解析し、鑑賞者の母語が美の評価予測に有意に重要な変数であることが示され、さらに日本とオーストリアとで美的評価に影響する属性が異なることが示された（例えば、日本人にとっては筆致や色使い等を重視する）。さらに、Study3-3 では、日本と欧州との美術作品や日常風景写真などを用いて、それらの画像を見る際の眼球運動を異文化比較で検討した。日本人は

オーストリア人と比較して、美術品を見るときにおいてのみ水平方向のサッカード（飛躍性眼球運動）が少なく、垂直方向のサッカードが多いことが示された。また、オーストリア人では下方向よりも上方向のサッカードを多く行っていたのに対し、日本人では両方向ともほぼ同じ割合で生じていた。これらの絵画や写真の観察におけるサッカード方向の特異性については、異なる文化での行動や習慣の側面について、例えば日本人における読みの縦方向性との対応等が考察された。

第5章 **General Discussion** では、本論文における一連の研究結果を整理した上で、あらためてそれぞれの研究間の結びつきによって解決される実験美学上の問題について説明を加えている。その上で、**Study 1** と **Study 2** とが生態学的に妥当な環境で十分に実証されている現象に関与する要因を明らかにするために行った点を改めて考察し、その上で **Study 3** は日本とオーストリアの2つの文化圏における美術鑑賞行動と評価とを比較し、現実の生活場面が彼らの具体的な行動や評価の在り方にどのように反映しうるのかについて考察している。さらに本章では、本論文の限界と今後の研究の可能性について考察し、本研究から再度リアルな環境に問題を移して研究を進展させることの重要性を議論している。

2. 審査要旨

本論文の審査会は2022年1月24日（月）日本時間22時から、Zoomを用いたオンラインによって開催され、本社会学研究科より2名、協定によりダブルディグリープログラムを実施したウィーン大学より2名、さらにイタリアと米国から2名の外部審査員を含め、計6名の審査委員によって審査を行った。審査員は実験美学、認知心理学、美術史の研究分野の国際的な研究者であり、多様な視点から審査され、本論文をもとにした三國珠杏君からの説明と質疑応答により評価がなされた。なお、本審査会は公開で行われ、審査員以外にも日欧から25名の参加があった。

人にとって芸術は文化的に関わることのできる不可欠な対象であり、人は美術館等で作品を鑑賞したり、様々な場所で音楽を聴いたりして、そこに美しさをはじめとした様々なことを感じる。芸術の認知や評価に関与する心の働きや行動については、実験美学だけでなく哲学的な美学や展示学、人間工学など多様な分野の関心を引き、近年学際的な発展を遂げている。心理学の一分野としての実験美学では、欧米や日本などの先進国における若者を対象とした実験室での実験的検討をもとに、人がどのように作品を鑑賞し、どのように評価を与えるのかについての諸要因を明らかにしてきた。本論文では、まず、従来のあたかも当たり前のよう検討されてきた実態を批判的に捉えながらも、逆に実験的検討によって何を明らかにすることができるかを正面から考察し、美術館などの実環境で捉えられてきた博物館疲労という現象を実験室環境で再現し、かつ日本とオーストリアとでの実験による比較を通して、その現象に関与する要因を明らかにした（**Study 1**）。次に、実験室での美術作品の鑑賞に伴う注意の低下現象を阻害し、作品に対する関心を維持できるような対策を講じることができないかについて、美術館の展覧会等でも用いられているセクション化の手法を用いて実験的に検討した（**Study 2**）。さらに、3つの異なる実験的研究を日本人とオーストリア人を対象に実施し、実験参加者の現実の生活場面での行動や認知が、彼らの美術鑑賞や美的評価にどのように反映しうるのかについて考察した（**Study 3**）。第1章 **Introduction** だけでなく、各章において詳細な先行研究のレビューを行い、**Study 1** から **Study 3** の綿密に練られた実験研究、統合的に各研究を位置付け直し、再度本研究の目的へと回帰した総合考察等、いずれについても高い完成度であり、十分に評価できる。

本論文を詳細に見ていくと、著者は、本論文の第1章（**introduction**）で、実験美学における現代の問題点を、実環境と実験室での作品鑑賞のギャップに関する問題と、限定された実験参加者を取り巻く問題について主に言及しながら、本研究における諸研究を位置付けた。それぞれの研究の章において、取りあげる研究の具体的な文献のレビューは行われているため、本章での先行研究のレビューはこれらの問題に関するものに限定されている。しかし、

実験美学の長い歴史における本論文の位置づけを独自の視点から明確にしなが、扱う問題と研究テーマの理論的根拠 (rationale) について明示しており、博士論文の序論としては十分なものとなっている。

第2章 (Study 1) および第3章 (Study 2) では、美術館や動物園等の実環境で実証的に指摘されてきた博物館疲労という既に生態学的妥当性が認められている現象を取りあげ、実験室での手続きとして再現した。モニター上に提示された美術作品の鑑賞の試行数に伴って、作品1つ当たりの鑑賞時間も評価も低減することを実験室条件下でも確認し、そのことを注意の低下を原因とした現象として捉え直した。なお、Study 1 では2つの実験において、日本とオーストリアで異なった文化背景で育った人々を実験参加者として検討し、文化が異なっても鑑賞時間および評価の低下の現象はほぼ一貫した現象として確認した。このことは第1章で取りあげている、実環境と実験室とのギャップ問題と、限定された実験参加者を取り巻く問題の2つを上手く併せて検討できている。実環境での現象を実験室で再現し、刺激や条件の統制によって現象に関与する要因を明らかにすることとしての利点を明らかにしている。また、Study 2 では鑑賞する作品についての情報 (例えばキャプション) の提示 (Study 2-1)、および提示作品の種類のみ (Study 2-2) が、美術作品の鑑賞の試行数に伴う鑑賞時間と評価の低減現象に与える影響を明らかにしたことは、実験室での検討をもとに実環境での展示方法に示唆を与えることができ、実環境と実験室とのギャップを埋めることにもつながっている点で評価できる。ただ、審査会でも指摘されたことであるが、Study 1-2 において、試行系列の半分の位置に挿入する90秒の小休止を、鑑賞時間や評価の回復には影響しないものと議論しており、そのことは美術館などの実環境下での鑑賞体験における休憩とは質が異なるものとなっており、結論を急ぎすぎた感が否めない。実験結果を実環境下での鑑賞に当てはめるだけでなく、その逆に美術館での鑑賞を再度実験での統制に当てはめ、その統制の不自然さなどについても再度吟味が必要であろう。

第4章 (Study 3) では、日本とオーストリアにおける3つの質の異なる研究を通して、美術鑑賞や美的評価に関する文化特異性や共通性を明らかにしようとした。Study 3-1 では、白黒のモザイクパターンを視覚刺激として、対称性への選好が文化に依存したものなのか普遍的なものなのかについて、既にオーストリアで行われた実験と比較する形で検討がなされた。日本文化における非対称性への好ましさがしばしば文化史等で扱われることがあり日本人の美意識として言及されることがあるが、非対称性への好ましさが顕在的か潜在的かについてはこれまで十分に検討されてこなかった。ただし、日本人大学生を実験参加者とした本研究では、評定実験での顕在指標でも潜在連合課題による無自覚的反応性に基づく潜在指標でも、日本人はオーストリア人と同様に対称性への高い好ましさが示されている。ただし、同じ日本人でも、大学生ではなく表現や鑑賞の熟達者や、より年齢層が高めの世代を対象にした実験では異なる実験結果が得られた可能性もあり、もう少し慎重な議論が必要であろう。さらに同章の Study 3-2 では、様々な美術作品 (絵画) に対する美しさの評定が作品のどのような属性に影響を受けているのかについて、日本とオーストリアとでの比較を行った。さらにその影響関係を検討するために、機械学習による解析を行った。その結果、日本人とオーストリア人とでは美しさの評定に影響する絵画の属性が異なることが明らかになっている。例えば、日本人では書道など柔らかい筆で書く文化が反映されているように、本研究では絵画に含まれる筆致が美しさの評定に影響を及ぼしていること等が明らかにされている。機械学習を用いた回帰分析は目新しい解析手法であり、作品の属性がどの程度美しさの評定に影響を及ぼすかを知る上で有益なものとなっている。欲を言えば、作品の画像統計量についても属性として説明変数として加えることで、作品の属性を量的特徴として捉えることができ、絵画の画像解析研究との整合性や発展性も生まれてくるように思われる。最後に Study 3-3 では、日本とオーストリアとで絵画や日常写真を刺激としてその鑑賞/観察における眼球運動を計測していた研究を行った。著者は、日本人が絵画を見るときに示した縦方向のサッカー (飛躍性眼球運動) が日本の書字文化を反映している可能性を示唆し、またオーストリア人が下方よりも上方のサッカーを多く行っていたことについて、透視図の手法の絵に彼らが慣れており中心下部から左右上部へと広がっていく眼球運動が多く示されたと解釈し

ている。日本人でもオーストリア人でも、文化に依存した対象や作品の見方や描き方といった習慣が、絵画や写真の観察においても眼球運動として反映されていると解釈された。

これらの Study 3 に含まれる 3 つの研究を通して、日本とオーストリアとで共通性を持って示された側面と、異なった特徴とが示された側面とが知見として提示された。各個別の研究としては完成度が高く、素晴らしい研究と評価できる反面、異なった文化がもたらす鑑賞行動や美的評価の普遍性と特異性についての総合的な議論はもう少し深められてもいいように考えられた。さらに、Study 1 と Study 2 とが扱っている現象が同一で調和が取れている一方で、Study 3 には個別の研究が異文化比較というだけで寄せ集められている印象が否めない。しかし総じて、鑑賞する人物の特性や取り巻く文化鑑賞の文脈や環境によって、鑑賞者の行動や感じることは様々であることは重視しながらも、一貫して実験的な操作によって検討を重ねている点は高く評価できる。さらに欲を言えば、美術館等の実環境の現象・問題を実験室での研究として展開し、再度実環境下での実証研究として具体的な研究レベルまで昇華させる研究があってもよかったと考えられる。ただし、この点については 2020 年来の新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大状況にあっては困難なものとなってしまったと言わざるを得ない。その点は今後期待したい。

その他の評価の観点について付け加えるならば、本研究が国際的かつ学際的な研究を幅広い観点から美術鑑賞（もしくは美的鑑賞）に焦点付けて研究しているという点についても言及しておきたい。本論文は社会学研究科とウィーン大学とに同時に提出したダブルディグリープログラムによるものであり、日本とオーストリアとで実験的手法を用いて実験参加者を集め、異文化比較を行った。本論文は資料を除いても 200 ページ以上に及び、ほとんどミスなく書かれている。論文だけでなく、審査会においても英語にてプレゼンテーションを行い、優れた英語力、コミュニケーション能力での確かな説明と質疑への応答を行うこともできた点も、高い評価ができる点として強調したい。

以上のように、本論文にはいくつかの問題点は存在するものの、その多くは著者自らが問題点として認識し、将来の課題として位置付けているものである。このことも考慮すると、これらは論文の価値を大きく損なうものとは言えない。むしろ、美術館等での実環境での現象を実験的研究へと落とし込み、さらに異文化比較を組合せることで著者の目的は十分に達成された論文になっていると考えられる。綿密に設計された実験を積み重ね、適切な統計分析手法を用いて結果を導いている点なども高く評価でき、著者の研究能力の高さが表れているものと考えられる。本論文の主張を検証する必要性は残っているものの、それは今後の課題と考えるべきもので、博士論文としての水準に影響するものではないと考えられる。また、著者の研究の独自性、新規性は高く、実験美学だけでなく展示学や哲学的美学等への波及効果も大きいと考えられる。なお、本論文に含めている個別の研究は、既に *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts* 誌、社会学研究科紀要に第一著者として掲載されたものであり、その他にも 2 編が国際誌に掲載され、1 編を国際誌に投稿中であり、積極的に成果を公開し、着実に研究者としての能力を身につけてきた。本論文での論理展開や実験手続きの堅実さ、分析の適切性などに加え、英語論文の分かりやすさや文章力についても考慮すると、本論文は非常に高い水準で、博士（心理学）の学位に十分に値するものであると判断できる。以上の理由により、我々審査委員一同は、本論文を三國珠杏君への博士（心理学）の学位授与にふさわしいものと判断する。